

年月日

18

10

05

ページ
17

NO.

和魂洋才 世界のリーダーへ

武田薬品工業^⑤



する企業

成功が足かせに

「世界は外部の技術革新で動いていたのに、武田は内部にどんどん焦点を当てていた」。武田薬品工業で研究開発を担う取締役のアンドリュー・プランプは、2000年以降に自社の研究開発の生産性が落ちた一因は内向き志向だったとみる。一般的に、製薬企業にとって自社で創製した新

自前主義捨て外部連携

薬は、ライセンス費用の支払いが不要なことなどから利益率が高い。しかし未充足の医療ニーズや創薬手法が変化し、創薬難易度は上がり続けた。米タツツ大学の調査によると00~10年の間、新

薬は、ライセンス費用の支払いが不要なことなどから利益率が高い。しかし未充足の医療ニーズや創薬手法が変化し、創薬難易度は上がり続けた。米タツツ大学の調査によると00~10年の間、新

多くの協働で創造性生む

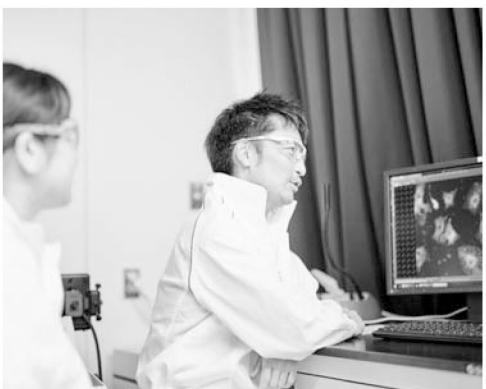
薬1品目の開発に要したコストは25億5800万ドル(約3000億円)。開発失敗案件の費用も勘案されているため、額が大きい。ドルベースでは90~00年のコストに比べると2~45倍に膨らん

だ。こうした状況下では製薬企業は自前主義に拘泥できず、ベンチャーなどから創薬シーズを導入する例も増えている。

武田は90年代に自社創製の新薬を複数発売し、いずれも世界売上高10億円超の大型製品に育て上げた。この成功体験が足かせとなり、社外との協業を深める流れに乗じて、自前主義脱却への意識を持ち続けており、「武田の研究開発における理念は協働、連携。創造性は多くの方々が集まるところで生まれた。産学官が連携する創薬活動の拠点と位置付け、学術機関やベンチャーランプ」。(敬称略)

研究拠点刷新

武田は08年に米バイオ



社内だけでなく外部との連携強化も求められる

医薬品企業ミレニアム・ファーマシユーティカルズを統合以来、大型M&A(合併・買収)を繰り返してきた。この点は外向き志向に変わった一例とも解釈できる。

だが武田社長のクリス

トフ・ウェバーは自前主義脱却への意識を持ち続けており、「武田の研究開発における理念は協働、連携。創造性は多くの方々が集まるところで生まれた。産学官が連携する創薬活動の拠点と位置付け、学術機関やベンチャーランプ」。(敬称略)

18年4月には湘南研究所(神奈川県藤沢市)を「湘南ヘルスイノベーションパーク(湘南アイパーク)」として刷新した。産学官が連携する創薬活動の拠点と位置付け、学術機関やベンチャーランプ」。(敬称略)